

# 国際連合エンブレムのイコノロジー

佐藤 正幸

## The Iconology of the United Nations Emblem

SATO Masayuki

### Abstract

At the beginning of the twenty-first century, the most widely circulated image of the world is arguably the North Polar-centered world map adopted in the emblem and flag of the United Nations. This emblem, in continuous use since 1947, has become a globally recognized symbol. This paper undertakes an iconological study of the United Nations emblem, tracing its origins and transformations with particular emphasis on historical and international-political dimensions. Iconology of world maps, as applied here, focuses on the way a map frames the world, analyzing motifs, the relationship between center and periphery, and symbolic elements.

Beyond identifying cartographic techniques, such an approach interprets the cultural, geopolitical, epistemological, and historical contexts of the map's creation, thereby uncovering the worldview and historical consciousness embedded within it.

キーワード：国際連合エンブレム、北極中心世界地図、イコノロジー、南緯 60 度、グリニッジ本初子午線  
key words : United Nations Emblem, North Polar-centered world map, Iconology, 60 degrees south latitude, Prime Meridian of Greenwich

### 1 国際連合エンブレムに描かれた北極中心世界地図の特徴

21世紀の初頭を生きている世界中のもっとも多くの人々が目にする機会の多い世界イメージは、[図1]に示した国際連合のエンブレムと旗が採用している北極中心世界地図であろう。<sup>1)</sup>この地図を日々目にするうちに、我々の潜在意識の中で、新たな世界イメージが脳裏に定着しはじめているのではないだろうか。

このエンブレムは1947年以降現在に至るまで使われているものである。この世界地図の特徴は、北極を中心にして世界が描かれていることで、正距方位図法(せいきょほういずほう)が採用されている。この図法では、地球全体を円で表現し、中心からの距離と方位を正確に表示できる。北極点を中心に南極点をあたかも球形ゴム袋の結び目

を全開した形にしてあるので、展延された南半球の陸地は大きく歪んでいる。しかしこの地図は南緯60度までカバーしているので、南極大陸を除く世界の陸地のほとんどがこの世界地図内に収まるようになっている。

さらにこの北極中心世界地図は、交差したオリーブの葉で囲まれている。オリーブの葉は、古代地中海文化において、平和を象徴するものとして用いられたことから、デザインに採用された。国際連合旗は、このエンブレムと同じ世界地図を使い、淡い青色の地に白で世界の陸地を浮き上がらせる図案を採用している。

本稿では、この国際連合エンブレムの成立・変遷過程を辿りながら、歴史的かつ国際政治的な側面に力点を置いたイコノジカル(図像解釈学的)な考察を行うものである。



図1 現在の国際連合旗に描かれた世界地図



図2 1945年4月-1946年12月に使用された国際連合エンブレム世界地図

イコノロジー (Iconology) という学術用語は、エルヴィン・パノフスキー (Erwin Panofsky) が『イコノロジー研究 Studies in Iconology』(1939) の序文で体系化したものである。彼の定義を本稿のテーマに適用すると、次のように言える。

世界地図のイコノロジー (図像解釈学的研究) とは、その地図が採用する世界の切り取り方に着目し、モチーフ・中心と周縁・象徴などを手掛かりとして、単に作図方法を同定するにとどまらず、作成当時の文化的・国際政治的・世界認識的・歴史的背景を踏まえて解釈し、その地図に内包される世界観や歴史観を明らかにする研究である。

## 2 国際連合エンブレムの原案は第2次世界大戦中に作成された

この北極中心世界地図は、国際連合という組織の発展と共に、表面的には微妙だが、しかし国際政治的には意義深い変更が加えられた結果できあがったものである。この世界地図のもとになった図案は、1945年4月に作成され、1946年12月までの19ヶ月間使われていた。[図2] に示す世界地図がそれである。<sup>2)</sup> このエンブレムは、日本が国際連合に加盟する1956年より10年も前に作成されたことになる。別な表現をすると、国際連合のシンボルマークの原型が作成されたのは、第

2次世界大戦の末期、ちょうど日本ではB29によるアメリカ軍の空襲が行われている時期であり、ヨーロッパ戦線ではドイツが無条件降伏をする直前であった。

このシンボルマークの誕生とその変更に関しては、あまり紹介される機会はないのだが、いかにして世界のイメージがつくれ、変更されてゆくのかの好例であるので以下でその概略を紹介したいと思う。実はここにも歴史が色濃く反映している。

## 3 連合国と国際連合

本題に入る前に、以下での話を理解しやすくするため、戦後の日本において使い分けをされてきた、連合国と国際連合という用語について、すこし説明しておきたい。

国際連合は、英語の The United Nations を日本語に翻訳したものである。この The United Nations と呼ばれる組織は1942年1月1日に結成されたもので、The Allies と呼ばれる組織を当時のアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトが名称変更した。この The Allies と呼ばれる組織は、日本語では連合国と翻訳されてきた。連合国は、第2次世界大戦において The Axis と呼ばれる国々と戦争を遂行した国々の名称である。この The Axis は日本では枢軸国と表記されてき

た。つまり、連合と国際連合は実は同じ組織をさすものであるが、戦後の日本においては、意外なことに両者の使い分けが行われてきた。

連合は主として第2次世界大戦において日本が戦った当事国を指すものとして使われ、国際連合は、第2次世界大戦後の世界平和を維持する国際機関として使われている。

国際連合という日本語が朝日新聞に初めて表れるのは、1945年9月8日の記事だ。<sup>3)</sup> ロンドンの国際連合準備委員会において世界情報機関設置の議論が始まったという記事が掲載されている同じ紙面には、連合軍の日本占領が長期間になりそうだとの記事が掲載されている。このふたつの組織に関連があるとは読者の誰も推測できないであろう。

第2次世界大戦後の日本占領軍の最高司令官ダグラス・マッカーサー（1880-1964）の正式肩書きは、「連合軍総司令官（Supreme Commander of the Allied Powers）」である。1946年10月21日の朝日新聞では、国際連合総会がアメリカで開催されたという記事が掲載されているが、同じ紙面で連合軍総司令部発表の記事が掲載されている。<sup>4)</sup>

ケネス・バークがいうように、古い新聞を読み返してみると、使用する用語の選択と事実を報ずる記事の配列とによって、その時点では意識の隅にすら浮かび上がることのない、しかしそれを読む人々に特有の世界観と歴史観が形成されてゆくプロセスを見て取ることが出来る。<sup>5)</sup> 歴史が今生きている我々の思考をコントロールしていることが手に取るように見えて興味がつきない。

日本語という母国語による文化の創造は、国民誰もが直接に世界の最新の知識を獲得できるというメリットをもつが、そこで採用される漢字の組み合わせを変えることで、本来意図しなかった、また日本の外では通用しない日本人だけの世界観や歴史観をつくりあげてしまうというデメリットも併せ持つことになるのだ。<sup>6)</sup>

1995年以降続いている国際連合憲章の53条と107条の、いわゆる敵国条項（敵国とは第二次世界大戦中にこの国際連合憲章のいずれかの署名国の敵国であった国と規定されており、具体的には

日本、ドイツ、イタリア、ブルガリア、ハンガリー、ルーマニア、フィンランドをさす）の削除をめぐる問題がある。国際連合通常予算分担率・分担金において加盟国中第2位（2018年からは第3位）を維持してきた日本が、<sup>7)</sup> なぜ国際連合安全保障理事会の常任理事国になれないのかという疑問を契機として、多くの日本人が初めて、この国際連合なる組織は実は第2次世界大戦中日本が敵として戦った連合国によって組織されたものであることを知るに至ったのだ。

では同じ漢字を使う中国ではどのように表記されているのだろうか。私は毎年講演や会議のため中国や台湾の大学を訪問するが、講演やディスカッションはいつも英語で行い、英語から中国語に通訳してもらおう。私が専門としている歴史哲学の分野では英語が世界共通語だからである。数年前ある会議で、日本ではThe United Nationsは国際連合と訳すと話したところ、中国人出席者は皆一様に首をかしげ、中国ではThe United Nationsを連合と表記していますと言われたことがある。中国人の出席者は日本が中国とは異なる漢字表記を使っていることを不可解に思い、私はといえば、日本語の連合がまず頭に浮かび、それとの関連で、中国では戦中戦後一貫して連合国が訳語として使われてきたようだ自分勝手な理解をしてしまったのである。

帰国後、気になって仕方がなかったので調査してみた結果事実は次のようであった。中国語ではThe Alliesは同盟国と訳され、The Axisは軸心国と訳されてきた。そして、The United Nationsは連合（簡体字では联合国、繁体字では聯合國と表記される）と訳され、現在でもこの訳語が使用されている。中国語でもThe AlliesとThe United Nationsは別な漢字の組み合わせで訳し分けられている。注意すべきことは、日本がThe Alliesの訳語に使用していた連合国が、中国語ではThe United Nationsの訳語として使用されているという事実である。

虚心坦懐に訳語を考えてみると、中国語の訳語の方が日本語の訳語より英語表記に忠実であることが分かる。日本語の訳語は、第一次世界大戦



図3 1945年4月-6月のサンフランシスコ会議で配布されたエンブレム

後に組織され国際連盟 (The League of Nations) と同じ主旨の国際平和機構だ、という歴史的な文脈理解の上に、国際連合と訳したのかもしれない。

日本と中国の間では、外国語からの訳語が統一されて使われていないことは、我々が今後自覚しておかねばならないことである。私自身の誤解の経験から言えることは、中国と日本における歴史認識のすれ違いのひとつには、国際連合に限らず訳語の不統一と錯綜という問題も存在するのではないかと考える。

以下の文章では、これまで日本語で表記されてきた連合と国際連合の使い分け表現をそのまま踏襲して書くけれども、実は同じ組織であることを念頭に入れて読んでいただきたい。そうすることで、この使い分けの巧妙さとその効果に多々気づくことも多いかと思う。漢字そのものをアイコン (図像) と考えると、漢字の組み合わせの仕方そのものが、まさにイコノロジーの研究対象と見なすことが出来る。パノフスキーの開拓したイコノロジーという学問は、彼が考えていた範疇を超えて、その研究を深化させることが出来るのではないだろうか。

#### 4 国際連合エンブレムの原案誕生

現在使われている国際連合のエンブレムから見てゆこう。国際連合でこの北極中心世界地図がエ

ンブレムとして正式に承認されたのは1946年12月7日の第1回国際連合総会であり、国際連合旗として同じデザインを使用することが承認されたのは、翌1947年10月20日である。

国際連合が国際機関として成立するのは、1945年4月から6月にかけて行われたサンフランシスコ会議である。この会議は正式には「国際機関に関する連合国会議 (The United Nations Conference on International Organization)」と呼ばれ、国際連合設立を決定し、国際連合憲章を採択した会議である。そして、1945年10月24日に国際連合は正式に成立する。

このサンフランシスコ会議の参加者のためにつくられたバッジが、国際連合エンブレムのデザインの原型である。これは、デザイナーであるオリバー・リンカーン・ルンドクイスト (Oliver Lincoln Lundquist; 1916-2008) が率いるチームによって作成された。このバッジ作成を実際に担当したのは、グラフィックデザイン担当のドナル・マクローリン (Donal McLaughlin; 1907-2009) であった。

このバッジは、[図3] に拡大して示した。実物は直径数センチの小さなものである。<sup>8)</sup> この世界地図を拡大したものが [図2] に掲げた北極中心世界地図である。

## 5 原案世界地図の特徴

この世界地図はその中心を北極に置いているが、その縦軸の中心にはアメリカ合衆国が配置されている。南アメリカ大陸はすべて描かれておらず、アルゼンチンとチリの一部が欠けている。これは南緯40度までを描いた正距方位図法のためである。しかし、円形世界地図をオリーブの葉で囲むというデザインの構想は現在のものと同一である。

マクローリンによると、図案と「国際機関に関する連合国会議、サンフランシスコ、1945」という文言を直径数センチの襟に止める円形バッジの中に入れるため、いろいろな図案を検討した末に、合衆国を正面真ん中に据えた北極中心世界地図を描き、それをオリーブの葉で取り囲む図案に到達したとのことである。最初は月桂樹の葉で円形世界地図を囲んだのだが、同僚から月桂樹は勝利のシンボルだと指摘されたので、最終段階で平和のシンボルであるオリーブの葉に差し替えたときマクローリンは回想している。<sup>9)</sup>

総括責任者のルンドクイストは『ニューヨークタイムズ』とのインタビューでつぎのように述べている。

We had originally based it on what's called an azimuthal north polar projection of the world, so that all the countries of the world were spun around this concentric circle, and we had limited it in the Southern sector to a parallel that cut off Argentina because Argentina was not to be a member of the United Nations. We centered the symbol on the United States as the host country.

(概訳) 正距方位図法による北極中心世界投影図を採用したのは、この同心円の中に世界中のすべての国が包摂できたからだ。アルゼンチンの一部が欠けているのは、当時アルゼンチンは国際連合のメンバーになる予定がなかったからであり、合衆国を地図の中心においたのは、サンフランシスコ会議の主催国がアメリカ合衆国であったからだ。<sup>10)</sup>

ちなみに、ルンドクイストもマクローリンも共にニューヨーク生まれのアメリカ人である。

## 6 現在の国際連合シンボルの誕生

さて、このサンフランシスコ会議の決定を受けて、翌1946年10月15日に国際連合の最初の総会が開催された。この総会において、ノルウェー人である初代の事務総長トリグブ・リー (Trygve Lie, 1896-1968) は、この新しい国際組織のために公式のエンブレムを作成すべきだとの提案を行った。彼による最初の提案は、サンフランシスコ会議で使われたバッジの図柄と同じ要領で、「世界地図を、北極を中心に正距方位図法で作成し、オリーブの葉を交差させて世界を取り囲むようにし、南緯40度までをカバーし、4つの同心円を描くこととする」というものだった。

この提案にもとづいてその後委員会で検討が行われ、同年11月18日に事務次長補は [図4] のようなエンブレムを総会に提案した。これにはリーの提案に若干の修正が施されていて、事務次長補はそれをつぎのように説明している。

As regards the design described in document A/10 7, it had been modified so as to include all the countries to the sixtieth parallel, instead of the fortieth, and the meridian of Greenwich had been made its vertical axis in order to avoid the truncating of countries and to represent them as far as possible in their proper relationship to the cardinal points.

(概訳) 国際連合のエンブレムの修正箇所はふたつである。ひとつは、世界のすべての国々が含まれるよう南緯40度ではなく南緯60度まで世界地図を拡大したことである。もうひとつは、グリニッジを通る子午線を縦軸とすることで、世界の国々すべての正しい方位を可能な限り表示できるようにしたことである。<sup>11)</sup>

そして、1946年12月7日の総会において、



経度と緯度によって特定される。緯度とは「地球の自転軸に垂直な平面が天球と交わって出来る大円」(『ブリタニカ百科事典』)を赤道と定義し、この赤道を緯度ゼロ度とし、北極及び南極を緯度90度として、両極まで等距離の地点を連ねた緯度が緯線と規定される。従って緯度と緯線は任意に変更できるものではない。

これに反して経度は、「地球の地軸を通る平面で、地球を切った切り口の曲線で、地球の両極を通る南北線」(『ブリタニカ百科事典』)と定義されているので、経度ゼロ線、つまり本初子午線は任意でどこにも決めることが出来る。事実グリニッジに本初子午線が決定するまで、パリ以外にも、十数カ所の都市が本初子午線の通る場所として使われてきており、世界地図はどの国で作成されたかで経度ゼロ線が異なっていたのである。

## 8 世界の空間と時間の基軸争奪戦

実はこの経度ゼロ線は、世界の空間の基軸にとどまらず、世界の時間の基軸をどこにおくかということにもつながっている。つまりこれは、世界の時間と空間の支配権をめぐる国家間の闘争でもあったということが出来る。この時空基軸を獲得した国は、人類がこの地球に住み続ける限り、地球時間と地球空間の中心であり続けることになる。

当時既に航海を含めた世界の多くの国はイギリスのグリニッジ時間を使用していたにもかかわらず、フランスがその事実をすんなりと受け入れなかったのは理由がある。実は、フランスの発明品であるメートル法自体が、子午線の長さをもとにつくられたという、歴史的経緯があるからだ。つまりメートル法は1795年に「パリを通過する北極から赤道までの子午線の長さの $10^7$ 分の1」と定義され、1799年には実測に基づいて白金(プラチナ)の標準器が作成されていた。<sup>16)</sup>

1884年10月にワシントンD.C.で開催された国際子午線会議の議事録(*International Conference Held at Washington for the Purpose of Fixing a Prime Meridian and a Universal Day.*)<sup>17)</sup>を読んで行くと、本初子午線をどこに置くかと同時に、計測単位を何にするのかという問題にフランス代表が固執し

ていた様子が浮かび上がってくる。グリニッジに本初子午線を置くことが決定した場合、当時イギリスで使われていたヤード・ポンドを計測単位として使うのか、それともメートルを使うのかは、本初子午線と密接に関わる大問題である。

国際子午線会議は1884年10月1日から11月1日まで、断続的に8回開催されている。グリニッジを本初子午線と決めた投票は1884年10月22日の第6回目の会合で行われた。フランスはこの提案に対して反対ではなく、棄権を選択している。投票に先立つ10月6日の第3回会議でフランスの代表イエンセン(Jules Janssen; 1824-1907)は、イギリスは早急にメートル法を導入すべきだと働きかけており、10月13日の第4回会議でイギリスの代表ストレイチャー(Richard Strachey; 1817-1908)は、次のように返答している

I am glad to have the opportunity of saying that I am authorized to state that Great Britain, after considering the opinions which were expressed at Rome, has desired that it may be allowed to join the Convention du mètre. The arrangements for that purpose, when I left my country, were either completed, or were in course of completion, so that, as a matter of fact, Great Britain henceforth will be, as regards its system of weights and measures, exactly in the same position as the United States.<sup>18)</sup>

(概訳) 英国は、ローマで表明された見解を検討した結果、メートル条約への加盟を希望している旨を、ここに宣言いたします。そのための準備は、私が英国を出発する時点で完了していたか、あるいは完了間際でありました。従いまして、事実上、英国は今後、度量衡制度に関して、アメリカ合衆国と同一歩調をとることとなりました。

ストレイチャーの発言通り、イギリスがメートル法に参加することをきめたのは1884年9月17日であり、本初子午線がグリニッジに決定される日

よりわずか35日前であった。

実は、メートル条約会議はこの会議に先立つ9年前の1875年にパリで開催されているにもかかわらず、イギリスはこのメートル条約には加盟していなかったのである。ちなみに、アメリカ合衆国の加盟は1878年であり、日本は1885年に加盟している。百年以上を経た今日、この国際子午線会議の議事録を読むと、本初子午線（経度0度）はイギリスに置くがその計測には（フランス原産の）メートル法を用いる、というイギリスとフランスの駆け引きと妥協の会議であったように読みとれる。

さて、イギリスとフランスの両国はこの国際子午線会議の決定をそれぞれの国で実際に施行したのかどうかということになると、両国ともしたたかであった。先に書いたようにフランスがグリニッジを通る本初子午線を受け入れたのは27年後の1911年である。一方のイギリスもしたたかで、公式には1884年にメートル法を導入したことになっているが、実生活でヤード・ポンド方からメートル法に移行したのは1995年になってからである。それはメートル法を共通尺度としているEU（欧州連合）への加入を承認してもらうためであった。

イギリスでもメートル法が普及し始めたかに見えたが、2020年のEU脱退以降、度量衡問題が再燃し、現在ではメートル法とヤード・ポンド法が併用されている。

ちなみにアメリカ合衆国では今現在でも、ヤード・ポンド方が専ら使われている。国際的な規約は、調印や批准までに長い年月がかかるが、それが実際に使われるまでには更にもっと長い年月がかかるのだ。

## 9 なぜ経度ゼロが世界の基軸時間となるのか

経度ゼロ度と世界の基軸時間との関係について基本的な説明をしておきたい。<sup>19)</sup> 地球は自転をしている球体で、太陽に直面している側が昼で、反対側が夜である。一回の自転にかかる時間を24時間と規定し、これを1日とする。地球が1回転つまり360度回るのに24時間要するわけであるから、360を24で割ると15、つまり、経度が15

度移動すると1時間の時間差が生じる。

地球は太陽に直面して南北を軸としながら東方向に回転している。そこで経度ゼロ線を基準とし、15度を1時間として東へ経度を追い一時間ずつ時間を早めながら進んで行き、経度ゼロ線の反対側、つまり東経180度のところまでを12等分することにする。また、経度ゼロ線から西へ15度刻みで1時間ずつ時間を戻りながら進んで行くと、西経180度のところまでを12等分することが出来る。

西経180度と東経180度はちょうど経度ゼロ線の反対側で出会い重なり合うことになる。経度ゼロ線上の時間を昼12時とすると、東経180度における時間はその日の24時となる。西経180度における時間はその日の0時となる。ここで日が一日変わるのでこれを日付変更線と呼ぶ。この変更線は太平洋上にくることになる。

次は、この経度15度つまり1時間の時差をどのように南北に線引きするかである。ひとつの国のなかに複数の時間を設定するのは国として不都合なので、国境にそって南北の線引きを調節してゆくタイムゾーンとよばれる各国ごとの時間が設定された。

このタイムゾーンという考えは、1884年にグリニッジ標準時が導入されはじめたころから世界各国で実施に移されている。そして、そのタイムゾーンが、経度ゼロ度の世界標準時と何時間違っているかを明確にすることで、全世界が一つの共通した時間の尺度を持つことが出来るようになったのである。これが時差と呼ばれるものだ。

ただし東西に広い領土を持つ国ではひとつの時間で統一することは非合理的なので、それぞれの地域で標準時を決めている。

アメリカでは太平洋岸と大西洋岸では本土だけで経度が70度異なり、5時間弱の時差があるため、東部標準時・中部標準時・山岳部標準時・太平洋標準時という4つの時間帯を国内に設定している。ロシアでは、経度差が150度、時間にして10時間あり、南北にも大きく広がっている国なので、11の標準時を使用している。

しかし中国のように、地理的には国土の東端と

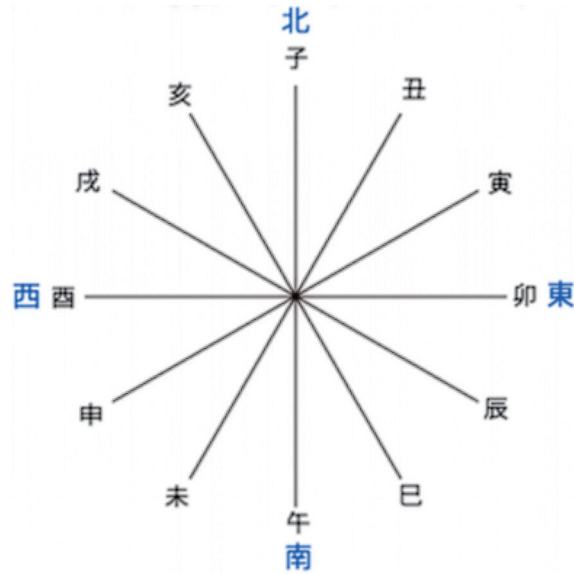


図5 方位に関する十二支

西端では経度60度、時間にして4時間の時差があるが、国内にはローカル時間帯を置かず北京時間で統一している国もある。

このようにして世界各地域の時間はすべてがグリニッジ標準時を基準にしてそのほかの地域との時差を設けることで同一世界時間を共有している。時間表示にGMT0550という表記がある。GMTはGreenwich Mean Time（グリニッジ標準時）の略称で、ロンドン郊外にあるグリニッジ天文台の敷地を南北に走る経度ゼロ線上の平均太陽時で午前5時50分のことである。日本では、これより9時間早いので、日本標準時（Japan Standard Time 略してJST）は14時50分となる。

メレディアン（meridian）の訳語として、子午線という馴染みのない言葉が使われている。これは、日本を含めた漢字文化圏では、伝統的に方位を十二支で表しており、子とは北を示し、午とは南を示している。従って子午線とは北極と南極を通過する弧線で地球の表面を巻いたものである。（〔図5〕参照）<sup>20)</sup>

これを経度と呼ぶが、これは織機にセットする経糸（たていと）に由来する語である。『易経』や『書経』といった中国古典を総称して経書と言うが、これも織機の経糸からきたもので、ゆるぎない世界の根幹を意味する語である。

## 10 世界の時空基準としてのグリニッジ天文台

この世界基軸時間を獲得したことで、人類は20世紀において驚異的な近代化を進めることが可能となった。この本初子午線が確定したことで、19世紀から20世紀にかけて喫緊の課題であった、海難事故を防ぎ航海の安全を確保することが出来るようになった。また、世界基軸時間は国際条約の発効日とか海外契約の成立日時等を特定するためだけでなく、飛行機や列車の時刻表、国際通信など、現在我々が享受している科学文明生活の基盤構築に多大の貢献をしてきたと言える。

したがって、100年以上を費やした争奪戦の末にやっと人類が獲得した世界共通の時空間の基軸である、グリニッジ天文台を通る経度ゼロ線を、国際連合のエンブレムが採用する北極中心世界地図の縦軸に置くことは、これまでの歴史的経緯と国際的観点からすれば、実に当を得た判断であったと言える。

もう一つ忘れてならないことは、第1回国際連合総会は、ニューヨークではなくロンドンのウエストミンスター・セントラルホールで開催されたことである。常駐の国際連合本部をアメリカに置くことが決定されたのはこの第1回総会においてであり、実際にニューヨークの現在地に国際連合本部が建設されたのは、1950年になってからのことであることを忘れてはならない。



図6 メルカトルの北極中心世界地図 (1595)

### 11 なぜ南緯60度に変更したか

つぎに、世界地図を南緯40度から南緯60度まで拡大したことを考えてみよう。北極中心世界地図を南緯40度ではなく南緯60度まで拡大することで、南アメリカ大陸のチリとアルゼンチンが入り、オーストラリアとニュージーランドも入ることで、世界のすべての国々をこの世界地図の中に納めることが出来るようになった。

しかし、この背景にあるより重要な理由として、南極大陸争奪戦がある。南極大陸付近は厳しい気象条件のため、歴史的に見ると人間がふつうに居住できるのは南緯60度が限界であった。ところが、20世紀に入ると、南緯60度以南に点在する島々の領有権を主張する国々が現れ始めた。1908年のイギリスによる一部地域の領有権主張を皮切りに、南極大陸を巡る新たな領土獲得競争がはじまった。

日本もこの争奪戦には参加しており、日本人最初の南極探検家として名高い白瀬矗（しらせのぶ 1861-1946）は、南緯80度5分西経156度37分の地点に到達した1912年に、その地点を中心として見える限りの氷原を大和雪原と命名し、日本の領土とすることを宣言している。<sup>21)</sup>

この世界各国による南極領土争奪戦は、1957-58年の第3回国際地球観測年における南極観測

を契機に新たな局面に入る。つまり、南極の平和利用に関する国際的な動きが大きく展開し、1959年12月1日に南極条約が締結された。この条約では、すべての南緯60度以南の地域に関して条約締結国は、領土主権又は領土請求権を放棄するという決定がなされている。南極条約の締結は、国際連合エンブレムに世界地図が採用されてから13年後である。しかしすでにこの頃から、南極条約に帰結するような南緯60度以南の領土争奪戦に対する議論が水面下で始まっていたのではないかと考えられる。

### 12 おわりに

現在、地球上の最も多くの人々が目にする世界イメージが、国際連合が使用する北極中心世界地図であることは確かである。実は歴史上最初に北極中心世界地図が作成されたのは、17世紀の初め、メルカトルによって作成された「北極地域図」(Septentrionalium Terrarum descriptio, 1595)」である [図6]。この世界地図が作成されてから300年以上、北極中心世界地図は、細々と描き継がれてはきたが、国連エンブレムに採用されたことで、再度、日の目を見ることとなった。

しかしながら、ヨーロッパ及び世界の多くの国々で使用され続けているのはヨーロッパ中心世界地図であり、アメリカで使用され続けているの



図7 Olaus Rudbeck, *Atlantica* (1689)の挿図 (The universal short title catalogue)

はアメリカ中心世界地図である。中国・日本・韓国で使用され続けているのは依然として東アジア中心世界地図である。

世界各国の外務大臣がテレビ会見を行うとき、その背後にはほぼ例外なく、自国を中心とした世界地図が壁に埋め込まれている。

ここ数年は、地図帳に代わって、インターネットが提供するパソコン・スマホ用地図アプリが多用されるようになった。世界空間も含めた空間認識のあり方が大きく変わろうとしている。

球形をした一つの地球が対象であるのに、2次元型世界地図を作成する時、スウェーデンの博物学者オラウス・ルドベック (Olaus Rudbeck, 1630-1702) の比喩を借りれば、<sup>23)</sup> 人々は自分を中心に据えて「地球の皮を剥ぐ」ことで世界を俯瞰し続けているのであり、[図7] その結果として各自異なった世界イメージを持つようになるのだといえる。「自分」を「国家」と置き換えると、この説明はもっと分かりやすくなるであろう。「主観的存在としての人間」(ホモ・サブジュクティヴス; Homo Subjectivus) から我々はなかなか

抜け出すことが出来ないのである。

古代中国の六朝時代に活躍した文人である郭璞(276-324)は、自らが注釈を付した『山海経』の序の中でこの人間の認識行為を次のように喝破している。

物不自異、待我而後異、異果在我、非物異也。  
(訓読;物自ズカラ異ナラズ、我ヲ待チテ而シテ後ニ異ナル、異ナルハ果タシテ我ニ在リテ、物ノ異ナルニ非ラザル也。)

(日本語訳;物それ自体が異なるのではなく、私が見る物を見て後に異が生ずるのである。異はまことに私にあるのであって、物それ自体が異なるのではない)。

経度ゼロ度を縦軸の中心とした、国際連合の北極中心世界地図が、世界の各地域が持つそれぞれの自己中心的世界イメージを相対化し、それを複眼的なものに変えてくれる可能性を秘めていることは確かである。(終)

## 注

- 1) 国際連合ホームページ。 [https://www.un.org/en/about-us?\\_gl=1\\*i6r99c\\*\\_ga\\*MTkzNjU4OTk0MC4xNzYyOTI1NTU0\\*\\_ga\\_TK9BQL5X7Z\\*cze3NjI5MjU1NTQkbzEkZzEkdDE3NjI5MjYwNTckajlxJGwwJGgw](https://www.un.org/en/about-us?_gl=1*i6r99c*_ga*MTkzNjU4OTk0MC4xNzYyOTI1NTU0*_ga_TK9BQL5X7Z*cze3NjI5MjU1NTQkbzEkZzEkdDE3NjI5MjYwNTckajlxJGwwJGgw) (閲覧日 2025年11月12日)
- 2) *The New York Times*, January 3, 2009.
- 3) 1945年9月8日朝日新聞第一面を参照のこと。
- 4) 1946年10月21日朝日新聞第一面を参照のこと。
- 5) この議論に関しては、Kenneth Burke (1937), *Attitudes Toward History* (The New republic, New York) を参照のこと。
- 6) 詳細は、佐藤正幸 (2016) 「西洋史学はディシプリンか—母国語による近代化の上に成立した世界的にユニークな学問」『西洋史学』(260) 42-55.
- 7) 外務省ホームページ・国連外交日本の分担金・拠出金による。 [https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/unp\\_a/page22\\_001258.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/unp_a/page22_001258.html) (閲覧日 2025年11月12日)
- 8) ICAO, The postal history of ICAO. [https://applications.icao.int/postalhistory/the\\_early\\_emblems.htm](https://applications.icao.int/postalhistory/the_early_emblems.htm) (閲覧日 2025年11月12日)
- 9) *The New York Times*, October 2, 2009.
- 10) *The New York Times*, January 3, 2009.
- 11) Report of the Secretary-General; *Official Seal and Emblem of the United Nations*, 15 October 1946. (Dag Hammarskjöld Library).
- 12) *Official Seal and Emblem of the United Nations*, pp.185-186, 1947. (Dag Hammarskjöld Library).
- 13) 以下の第50回本会議議事録を参照のこと。 Fiftieth Plenary Meeting, Saturday, 7 December 1946. 134. Official seal and emblem of the United Nations. p.1005.
- 14) グリニッジ王立天文台自体は1990年にケンブリッジのチャーチル・カレッジ西隣に移転した。経度ゼロ線が通過するグリニッジの天文台旧本館は、現在ではグリニッジ公園の一部となっている。煩雑さを避けるため本稿ではグリニッジ天文台と表記する。
- 15) グリニッジ時間誕生の歴史的背景に関する詳細は、Derek Howse (1997), *Greenwich Time and the Longitude* (邦訳; 橋爪若子 (2007) 『グリニッジ・タイム』 東洋書林 pp.161-201.) を参照のこと。
- 16) メートル法の歴史に関しては、Ken Alder (2002), *The Measure Of All Things*. (邦訳; 吉田三知世 (2006) 『万物の尺度を求めて』 早川書房 pp.413-443.) を参照のこと。
- 17) Dag Hammarskjöld Library[New York]所蔵のものを使用した。現在ではProject Gutenberg にも収録されている。
- 18) 前掲議事録 (Project Gutenberg 版) p90.
- 19) 帝国書院や東京書籍の中学地理教科書及び、『平凡社大百科事典』『ブリタニカ百科辞典』等を参照されたい。
- 20) 出典は、国立天文台・暦計算室の「方角に関する十二支」。 <https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/BDBDC6F3BBD9.html> (閲覧日 2025年11月12日)
- 21) 神沼克伊 (2009) 『地球環境を映す鏡 南極の科学』(講談社) pp.60-62.
- 22) 条約本文は National Science Foundation を参照のこと。
- 23) Olaus Rudbeck(1689), *Atlantica* の挿図。地球の皮を剥いているルドベックを取り囲んでいるのは、ヘシオドス、プラトン、アリストテレス、プトレマイオスといった西洋古典古代の偉人たちである。